



僕の妹は
怪盗に変装
しているつもりです。

小説 神楽陽子
挿絵 高瀬むう

立ち読み版

第一話 怪盗えつくすキュートは、僕の……？

第二話 お兄ちゃんは中出し主義っ！

第三話 ブルマに着替えて性教育

第四話 マゾな便器のアクメな素顔

エピソード 妹にヌいてもらう日々

登場人物紹介

Characters



う さ み み う
宇佐見美宇

K中央学院の生徒会長で、悠の妹。
長い間疎遠だったせいか、悠に対する態度は冷たい。

う さ み ゆ う
宇佐見悠

ふとしたきっかけで怪盗えっくす
キュートと出会い、過激なアプローチを受けることに。
えっくすキュートの正体は美宇であると確信しているのだが……!?



かいとう

怪盗えっくすキュート

最近、K中央学院に現れる神出鬼没の少女。
不思議な手品を用い、教師に没収された私物を取り返す。マスクの下から覗く愛い容姿と豊富なバストで、男子からの人気も高い。

食欲旺盛なお兄ちゃんは、促されるまま頬張り、小突起に舌を巻きつけた。乳果に重量があるため、強めに吸い上げる。

「んむつ、あぷは！ はあ、美味しいよ、ここも」

吸ったあとは優しく舐め、可愛がるようにあやす。妹は心地よさそうに脱力し、スノコにぺたんと座り込んだ。

悠も屈んで乳芽をしゃぶりつつ、豊熟の果実を丹念に揉みしだく。生乳の半ばを掴んで搾り、ぷつくりと膨らんだ突起を頬張る。

「お兄ちゃんたら、えへへ、赤ちゃんみたい……んふああ！」

妹はママの気分で乳を与え、加減のない吸い付きに悶えていた。特徴的なツインテールが小顔に「ウサミミ」の黒リボンを乗せ、しきりに跳ねる。

手品どころではない両手は、セーラー服の襟を広げるように掴んで、敏感そうに小指をぶるぶるさせていた。

（すぐく変になりそうだよ、こんなこと）

妹の初々しい反応にそそられて、乳吸い行為をやめられない。揉めば揉むほど悠の息も乱れ、生乳に涎をばらまいてしまう。

「美味しいよ。キュートも食べてごらん？」

意地悪なお兄ちゃんは巨乳を力いっぱい持ち上げ、少女の緩んだ唇に乳角をふたつとも近づけた。本人が咥えることもできる圧倒的なサイズである。

従順な妹はアーンと唇を開いて、自分の一部を咥え込んだ。頬を膨らませ、それこそ赤子みたいに下手に吸う。

「んちゅっう、あむお……ほんろにおいひい」

もぐもぐと口を動かし、外す際には涎の糸を引く。

途端に豊乳は落下し、スクール水着のずれめで揺れ弾んだ。紺色の薄生地はジューズを吸い尽くし、じゅくじゅくの潤沢を放っている。

「や、やだ。お兄ちゃんてば……」

恥じらう妹の視線の先には、お兄ちゃんの股間があった。ズボンは「テント」を張っており、生地に突っ張っている勃起が痛い。

「いやこれは……その」

実の妹に興奮してしまう不埒なオチンチンである。頭ではタブーとわかっているけど、欲情せずにいられない、無節操な生理現象が恥ずかしい。

「お兄ちゃん、ちゃんときゅーとに見せて？ プレゼントあげる」

えつくすキュートは両手を後ろに隠し、ごそごそと動いた。プレゼントとやらをすぐには見せてくれず、背中の中で持つ。

「見せてって、お……オチンチンを？」

「うん。じゃないと、きゅーとが脱がしちゃうもん」

ベルトを緩め、ズボンの両端に指を引っ掛けたものの、悠は迷った。

（いいのかな。こんなの見せちゃっても）

逸物など女の子に見せるものではない。けれども、見せたい、見て欲しいなどと困った欲求も込み上げて。悪寒じみた後ろめたさに背筋がぞくつとし、心拍数を跳ね上げる。（そ、そうだよ。最後までするわけないんだ）

それでもお兄ちゃんは膝で立ち、意を決してズボンごとパンツを降ろした。形だけなら立派な童貞を妹にひけらかす。

「これが僕のだよ、キュート。びっくりさせちゃったかな」

もうそれだけで、失禁でもしてしまいそうな胸震えに襲われてしまう。

「すごい……男のひとのって、こ、こんなにおっきいんだ？」

妹はやや尻込みして、慎重に近づいてきた。悠にもわかりやすい驚きの表情でしげしげと勃起を眺め、息を呑む。

根元に剛毛を生やした肉棒は、幹を肥大に太らせ、青い血管を表面に浮かび上がらせていた。肉体の一部にしては、肌よりも黒ずんでおり、衛生面には多少の不安がある。

パンツと擦れて痛かった亀頭は真っ赤に腫れあがり、分厚い傘を張っていた。全体が一本の血管であるかのように脈打ち、今日はいやに重たい。

逞しい勃起ぶりを、処女が不思議そうに見詰め、瞳をぱちぱちと瞬かせる。

「お兄ちゃん、きゅーとにコーンしちゃったの？」

「そっそれは！ キュートが、あ……あんまり可愛いから」

普段の美宇には言ったことのない台詞だった。えつくすキュートが無邪気な小顔に照れと恥ずかしさを浮かべ、はにかむ。

「じゃあね、お兄ちゃんにプレゼント。知ってる？ 怪盗えつくすキュートは盗んだモノをどうするでしょお？」

「え？ ええつと……どうするのかな」

クイズの答えが思い当たらない。

回答を待っていたらしい妹が、後ろに隠し持っていたプレゼントを明かす。

それはおさげを結ぶのと同じ、黒いリボンだった。

「そうか、えつくすキュートって必ず、盗んだものはリボンで結んで……わわわっ？」
「じつとして？ お兄ちゃんのはトクベツ可愛く盗んであげる」

もしかしたら「盗む」と「結ぶ」の語呂をかけているのかもしれない。怪盗少女の手が雄々しい剛直にリボンを巻きつけ、根元で大きく蝶結び。

少女趣味のコスプレによってオチンチンが締め付けられ、びくんとたうつ。

「キュートっ？ ここ、これって」

猛烈な羞恥が込み上げ、腰が引けてしまった。

「隠しちゃだーめ」

しかし勃起は前に飛び出し、ありのままを妹に見せ付ける。「見せる」興奮を知った肉棒はさらに膨張し、せつかな先端から透明の蜜を滲ませた。

同世代の男子に比べて、悠のモノはやたら大きいらしい。右手と左手で段違いにサオを掴んでも、手の中から亀頭が食^はみ出す。

「エヘヘ、お兄ちゃんたら真っ赤^く。オチンチンも撮^つっちゃおうと」

悪戯好きな怪盗は携帯電話で、お兄ちゃんの本性を激写した。こまめにカメラの角度を変え、元氣な勃起を撮り尽くす。

「こっくら！ 撮^つたりしないでよ、キュート！ 恥ずかしいから」

「記念だよ？ お兄ちゃん、童貞でしょ。今しかない姿を記録してあげるの」
妹にやられっ放しではいけない。悠も携帯電話のカメラ機能をオンにし、巨乳少女の罪作^りな水着姿をねめつけた。

「じ、じゃあ僕も。キュートの……撮^りまくっちゃおうかな」

撮影対象がぼつと赤面し、実り豊かな裸乳をかき抱く。

隠しきれないポリウムは何度見ても圧倒的だ。

「やん、お兄ちゃんに、きゅーとの……？」

ソフトな材質のスノコの上で、おもむろに妹は仰向けに寝そべり、カメラに向かって脚を一度は閉じた。玉の水滴をちりばめた、あられもない太腿を擦り合わせる。

そして頬をこれまでになく赤く染め、股を大胆に開いていく。羞恥で声をうわずらせても見せようとする姿勢が健気で、可愛らしい。

「そうだよね。お兄ちゃん……きゅーとの処女、キレイに撮^つて？」

スクール水着の水抜きを指で広げ、清らかな穴をささやかに覗かせる。

無意識のうちに悠も低めに屈んで、釘付けになっていた。

（え？ ココが？）

生えてもない幼い股座^{またぐら}には、「穴」と形容するものが見当たらない。手前のほうに縦筋があり、そこに若干の隙間があることはわかるのだが。

年下の少女は太腿を抱えつつ両手を伸ばし、謎の縦筋に指を添えた。少しの力が加わると、クレバスがくばあと拡がり、淫らな正体を明かす。

「ココだよ？ お兄ちゃん」

舟形に開いた秘裂の中は、オレンジがかったピンク色の粘膜で満ちていた。二枚の肉唇が花のように綻び、発情した牝のにおいを漂わせる。

花びらの下にはもう一枚、唇らしいものが隠れており、その奥にようやく本命の膣口を発見することができた。

見た限りではペニスが入り込める大きさではない。指一本でも入るかどうか。

「んはっあ、よく見て？ これがね……ンあ、きゅーとのくりとりす」

少女の中指が小陰唇の上端を突ついた。そのポイントには突起が埋もれており、包皮が捲れそうになっている。女の子の弱点のひとつだ。

「きゅーとね、オナニーする時は、んふぁ、ココを……あんっ、くりくりするの」
オナニー少女が指を繰るたび、ネチャネチャと粘液が鳴る。なやかな顔つきは羞恥と

ともに肉体の快楽も浮かべて、灼けた吐息を散らした。

スクール水着の水抜きを開きつつ処女穴を弄るといふ、器用さよりも「慣れ」からして、自慰が癖になつてゐるのは想像に容易い。

「撮るよ？ えつくすキュートのオマ○コ！」

怪盗少女のオナニーショーを、悠は夢中で激写しまくつた。

カシャッ！ カシャッ！

処女の潤いをアップで撮るだけでなく、先端のよく尖つた巨乳や、アイマスクに隠れたつもりらしい妹の、恥ずかしさに満ちた表情も逃さない。

「お兄ちゃんのも、きゅーとが、い、いっぱい撮っちゃうんだから」

お互い携帯電話のカメラを構え、兄妹間には相応しくない股間の有様を写しあつた。今まで相手に教えなかった、知るはずもなかった部分に目掛けてシャッターをきり、回数を競う。モバイルの扱いは妹のほうが慣れていて、ペースが速い。

リボンの可愛いオチンチンが頻繁に疼いて、勝手に前へ前へ出ようとする。気がつけば悠本人が膝でも前進していた。

「心臓がおかしいくらい、っはあ、どきどきしてるよ、僕」

発話を妨げられるほど呼吸が荒れ、肉体は異常に熱化している。心臓もひっきりなしに暴れて、過剰な興奮状態に陥つた股間に、熱い血液を循環させる。

自慰ならペニスだけで済む苦しさが全身に広がるかのようだ。今すぐ肉柱を抜き降ろし



たくて、オナニーを始めそうになる。

ピピーツ！

その時、ホイッスルの音が聞こえた。どこかのクラブが吹いたのだろう。ここが学院の中で、それも女子更衣室などであることを思い出し、悠は慌てて股間を隠す。

（やっやばいよ、僕、すっごいコトしてるんじゃない……）

寒気めいた緊張感に背筋がぞくつとした。女子水泳部の誰かがこちらの更衣室に入っていない、とは限らない。ペニスを出しているところなど、見つければおしまいである。

怪盗えつくすキュートも恥部を隠したがっていた。悠と同じ種類の緊張で、四肢を強張らせ、オナニーを続けるか決めあぐねている。

「お……おしまいになって、してあげないもん。はあ、これからだよ？」

妹のほうは撮影を止め、携帯電話を手放した。その代わり両手で秘裂を拡げ、見ているだけでもおいそうなピンク色を潤ませる。

外側の肉唇も内側の肉輪も、刺激が足りなそうにひくついていた。玉の淫液がとろりと両脚の付け根を伝い落ちる。

「きゅ、キュート……」

さっき笛が鳴らなかったら、お互い自慰で終わったかもしれない。

焦らされた肉棒は、妹に抱いてはならない気持ちむらむらと膨らませていた。自制が利かないほどの性的興奮は初めてで、重心がふらふらする。

（キュートと……僕は、妹と？）

彼女が妹かもしれないことくらい、頭ではわかってるつもりだった。

（い、いや！ 美宇なわけがないよ、あの美宇が僕と、エッチしたがるなんて……）

それでもセックスのために肯定はしない。実妹ではないのだから、という口実が理性を黙らせ、男性の本能を解き放つてしまう。

「し、しようか？ キュート」

悠は前かがみになり、妹の水着姿に覆いかぶさった。特徴的なふたつのおさげを、右と左にのけてやり、どこか懐かしい小顔を覗き込む。

「きゅーと、初めてだから……優しくしてね」

はつきり「セックス」と言わずとも、これから始めることに同意があつた。アイマスクで隠しきれていない、いたいけな瞳に弱気な涙が滲む。

妹の手はまだ決めあぐねていて、処女穴を隠したり、指の隙間から覗かせたり。

「いやその、キュートが怖かったら、しなくても……いいんだけど」

怖いのは、本当は悠のほうかもしれない。これ以上はどうしても彼女の身体を傷つけることになる。しかし妹は悠のため、懸命に秘裂を拡げてくれた。

「だいじょぶ、お願い……はやくして？ お兄ちゃん、恥ずかしいから……」

このまま肉交に応じないでいるほうが、むしろ酷だろう。

覚悟を決めて悠は、真っ赤なオチンチンを構えた。それを、少しずつスクール水着の水

抜き穴へと潜り込ませていく。

「ほんとに挿れるよ、キュート。……こ、こうでいいのかな？ 僕も初めてだし」

「きゃっ？ んあ、た、たぶんそこ、んはあ……あ、当たってるよお」

実兄の勃起が実妹の入り口に肉薄した。コスプレ少女が太腿にきつく指を食い込ませ、精一杯に無抵抗な開脚姿勢でいようとする。

（オチンチン挿れて、ほんとに、出すんだよね？）

女の子の穴を今から便器みたいに扱^{やま}う疚しさを、振り切ることはできなかった。けれども、それ以上にいかがわしい期待も大きい。

ところが挿入以前に四苦八苦した。

「ひあっ？ ち、違うよ、お兄ちゃん……んはあ、もっと前のほう」

「え？ 前のほうって、ええと、このへんかな」

悠も美宇も腰を捻り、男女の凹凸を合わせようとする。スクール水着と擦れるうち、妹の温もった巨乳にお兄ちゃんの上半身が乗っかる。

雁太がやっと肉唇の隙間をくぐった。唾液みたいな妹汁が裏筋を熱く伝う。

ずぶっ！ ずぶずぶずぶ！

「ああ入ってる！ おっ、お兄ちゃんの、ひはっあ、入ってきてるう！」

高温のぬめった感触とともに身体中の細胞が騒いだ。単純な刺激だけでなく、これからセックスが始まるのだという緊張感と。

そして、兄妹の一線を踏み越えてしまう背徳感。

「い、痛かったら言うんだぞ？」

いざ始まると、後ろめたさが恐怖となって期待を上まわり、心理的に腰が引ける。だがオチンチンは節操なしに硬く興奮し、妹の秘密をこじ開けた。

大ききのせいでどうしても乱暴になり、張り出たエラが処女を無理やり捻げる。

「んい い い い ……！ だ、だいじょぶ、だから……んふあ、やめないでっ」

片目を伏せ、歯を食いしばる表情は間違ひなく苦痛のものだ。瞳に涙を溜め、何回も鼻をすすする。強がりな嘘にしかない。

普段の美宇であれば、何を思っでどんな顔をするのか、悠にはわからない。しかしこの妹が、必死に処女の痛さと怖さを隠そうとしているのは、すぐにわかった。

「痛いよね？ キュート、ごめん、くうっ、僕のが大きくて！」

こちらと同じくらい怖くて、痛みに近い締め付けに歯軋りもした。

「もっときて？ お兄ちゃんに、きゅーとの、ひうっ、きゅーとの処女あげたいの！」

「ちゃんと僕が貰ってあげるよ。キュートのバージン……くうううっ！」

肉体の苦しさを共有し、ふたりともゼゼエと息を乱す。まだ三分の一度程度しか入っていないのに、もう汗だくだ。

それでも男性が一方的に挿れるのではなく、共同作業となつて、挿入とともに互いの信頼も深まってくる。悠は妹の強張る肩を抱き、剛直をさらに押し込んだ。

押し込むと、狭苦しい拡張感が雁首を滑り落ち、ヒダヒダで亀頭を歓迎する。その快感は尻込みするほど激しく、勃起どころか股関節まで痺れついた。

「あんっ！ あはあ、おっ、お兄ちゃん！ これ気持ちいいよお！」

オマ○コのほうも「出して、出して」と甘えたがりの性格で、お兄ちゃんのおチンチンを苛烈に締め付けたがる。ずぶ濡れのえつくすキュートは四つん這いになって、巨乳を浮かせ、肉体を前後に弾ませた。

潤沢のあるスクール水着が、腰つきを舐めるように照り返らせる。茹で上がった柔乳に玉の雫を散らしながら、懸命にのけぞろうとする、少女の身振りも悩ましい。

妹への愛着は衝動となって身体を駆け抜けた。

「まだまだ、はあ！ くう、だ、出してあげないからね！」

悠の手がスクール水着を這い上がり、乳果の膨らみを押し掴む。後ろからでは見えないからこそ、指先の感覚を研ぎ澄まし、曲線を丁寧に取り出していく。

四つん這いでバックから突きまくられる妹は、悠の腕にも抱かれて悶えた。被虐的な声のトーンが一段と高くなり、男性の獣欲に拍車をかける。

「はっはやく、はやく出してくれなきゃ、きゅーとの、あふう！ きゅーとのあそこ、おかひくなっちゃうからあ！」

猫科の動物みたいに腕を床に突っ張らせ、小柄な背中をくいつと反らす。

おかげで巨乳は触り放題だ。肩紐をずらすと、ウサギどころか牛のサイズもありそうな

肉釣り鐘が、どうにか片方だけ飛び出す。白い肌は火照り、お湯と汗でべとべと。

その麓に、お兄ちゃんの手が指をいくつも食い込ませた。

「こんなオッパイだから、はあっ、妹でもコーフンしちゃうんだよ！」

生の柔らかさは重たくもあり、お湯で滑ってしまふ。そうならないように、しっかりと掴もうとすればするほど、手つきも躍起になる。

たわわな果実の先端は円柱型に尖り、しきりに疼いていた。そこをくりくりと指先技で弄ると、怪盗少女の肩から力が抜ける。

ひっきりなしの喘ぎはすでに切羽詰まっております、呂律がまわっていない。

「あへあああ！ おおっおっばいまでいっしょにされたら、はふっ、気持ちよくなりしゅぎて……あんっ！ そこらめ、お、お兄ちゃん！ あん！ ああん！」

「どっちがだめなの？ おっばい？ はあっ、それとも、くうっ、こ、こっち？」

柔らかな乳果に背後から掴まり、悠は腰も突き動かす。後背位は牝穴を穿りやすく、怒張が毎回、子宮に熱烈なアタックを仕掛けた。

じゅぶっじゅぶ！　じゅぶじゅぶじゅぶ！

そのたびにお尻の弾力とぶつかり、リズムよく押し戻される。この体位では相手が見えないため、妹は不安そうに、頻繁に振り向き、ツインテールを肩で流した。

「お兄ちゃん、ふああ、はなしちゃだよ？　さ、最後まで！」

素直なオマ○コが「出して」と肉襷で囁きかけてくるのと同じく、お兄ちゃんのおチン

チンも「出したい」気持ちでばんぱんだ。

「放すもんか！ キュート、いいよつ、気持ちいい！」

お兄ちゃんの手が怪盗えつくすキュートの巨乳を、やや乱暴に揉みしだく。

同時に、太めの攪拌棒でスープを泡立て、ぬかるんだ肉洞を丹念に磨いてもやった。窄まりがちな拡張感を前後にくぐり、膣粘膜に白泡を馴染ませる。

「もつと、はあ、こんなふうに？ キュートっ、どう？」

「ひあああッ!? なっ、なにこれ、えはあ、かきまわされちゃう！」

角張ったエラの使い方にコツがあるのだろう。悠は三百六十度を意識して、抜き挿しの角度を小刻みに変えてみた。肉襞を混ぜ返すように、射角を上下させて押し込んだり、ネジみたく斜めに捻って引き抜いたり。

すると、これまでは摩擦の弱かった部分とも強く擦れて、えつくすキュートの息遣いも格段に激しくなる。

「すごいよお、お兄ちゃん！ ひはう、オチンチンが、ちっ、ちがうの！ さつきより、エッチなうごきかたしてるうううッ！」

ストロークは単純な直線ではなくなり、肉棒に吸い付かざるをえない膣を、半ば強引にうねらせた。肉穴のほうもヒダヒダを蠢かせ、お兄ちゃんの勃起を食べ尽くす。

むず痒い亀頭は磨かれて、ひりひりするくらい淫熱が高まっていく。いくらでも刺激が先端に飛びついてくる快感に、腰が抜けそうだ。

肉唇から高温のソープが溢れ、兄妹の結合を淫靡に潤す。

「だいぶキレイに、っはあ、なったかな？ あとは僕の、精液シャンプーを！」

「ま、待つて？ お兄ちゃん、あふう、まだシャンプー、出さないで？」

悠がペースを上げようとしたのを、妹が止めた。グローブの手を股間に潜り込ませ、肉柱を握ってまで止めたのだ。

アイマस्कの中でいっぱいに涙を溜めた、情熱的な羞恥がいじらしい。

「お兄ちゃんはじっとしててね、きゅーとが、ふあ、いまからあ」

そして右脚を宙に浮かせ、うつ伏せの姿勢を大胆華麗に反転させる。回転ついでに膣肉も渦巻くように締め、肉唇のキスを幹太に這わせた。

「もしかして、こうしたいとか？」

騎乗位の願望を読み取った悠が寝そべり、巨乳少女を上を跨らせる。妹を可愛がるためなら、お兄ちゃんはいつだって力持ちだ。

「お兄ちゃんにばかり、へあ、リードさせたげないもん。次はこおやつて、きゅーとがうごいへ、んはあ、あげるね」

豊満な肉体に純情なベビーフェイスが乗っかかり、ウサギの耳を揺らす。

魅惑の肢体は、ニーソックスの装いがアダルトイックな両脚をMの字に曲げ、兄妹の罪深い結合をひけらかした。

スクール水着からは美味しそうな太腿がむっちりとし食い出しており、兄に目を離すこと

を許さない。妹の穴へと深々と挿さった肉棒も根からのたうつ。

「あはああ……こ、これすごいもの、じつとしててもイっちゃいそう」

少女の体重がかかるせいで、怒張は子宮にめり込んだ。

この体位なら、生乳を隠してもいられない妹の、脚で踏ん張る健気な姿が丸見えだ。罪作りの肉体に半分ほど引つ掛かったスクール水着は、学院の女子を連想させる。

（夢じゃないんだ、ほんとに僕、美宇と！）

肉体が熱く昂るほど、抑えきれない想いが股間にも込みあがってきた。本来は妹を守る立場でありながら、妹の生殖穴を犯してしまう背徳感にぞくぞくする。今すぐ柔乳を掴みなおせる力を出せなくとも、せめて、汗だくの太腿をさすっていたい。

「キュート、じゃなくって……美宇、いいよ、すごくいい」

甘えん坊の妹は真つ赤に照れ、誤魔化そうとした。

「お、お兄ちゃん？ きゅーとは、んあ、美宇ちゃんじゃ……な、ないよ？」

「じゃあ美宇に伝えてよ、キュート。くふう、美宇に、僕の気持ち」

疎遠であるとか、一緒に住んでいないからといって、不器用に距離を取っていたのかも知らない。けれども無関心ではいられなくて。

「こんなに可愛い妹、うあ、誰にも渡さない。ずっと、僕だけのモノにしたいんだ」

もし美宇が妹でなく赤の他人だったなら、ここまでの独占欲はなかっただろう。

怪盗えつくすキュートが恥ずかしそうにも、嬉しそうにも頬笑む。学院の美宇のように

ハキハキとはものを言えず、口下手だ。

「お兄ちゃん？ 美宇ちゃんはきつと、んへあ、そんなこと言われたって困るよ……実の兄妹なのに、れっ、恋愛だなんて」

その右手がアイマスクの位置を確認した。目元しか隠れていないにもかかわらず、正体はばれていないつもりらしい。

それから、改めて悠の胸板に両手つく。

「きゅーとはきゅーと、な、なんだから……あふえあ、ほかの女の子の話するお兄ちゃんなんかっ、こおだよ？ えへあえああッ！」

ずぶ濡れの太腿は百八十度まで開いた。両脚が爪先を立て、しなやかさを瞬発力とした淫ら腰を打ち始める。

ずちゅっずちや、ずちゅ！ ずちやつ！ ずちゅ、ずちや！

ソープたっぷりの妹穴が、お兄ちゃんの太さを貪欲にしゃぶった。

「ふあっ、ひは！ お兄ちゃんのいもおとは、きゅ、きゅーとだけでいいのっ！」

えつくすキュートがおさげとともに腰を懸命に波打たせ、抜き挿しをモノにする。結合部ばかり見詰める、惚れ惚れとしたまなざしもいやらしい。

狂おしそうに喘いで、熱っぽい吐息をばらまく。

「あっあん！ はあん、すごい、ほんとにこれしゅごいよお！ おっオマ○コがね、深いの！ オチンチンがずぼずぼって入っちゃうのお！」

泡立つ白泡がスクール水着のフロントデルタを這い上がった。お風呂の湯気に包まれる
豊惑的な悦がり姿に、悠の目は釘付けになる。

「いいぞ！ 美宇っ、ずぼずぼ！ うあっ、ずぼずぼが気持ちよすぎる！」

妹が膺の締め付けを強めるせいとか、言葉通りに「ズボッ」という拡張感が毎回ペニス
を呑み込んだ。肉襷の流れは恐ろしく速く、瞬く間に快楽神経が痺れついてしまう。

全身が真っ赤に過熱し、お湯に濡れても存在感のある恥汗を滲ませる。このまま身体
の水分を残らず搾り出されてしまいそうだ。

「だからきゅーと、みつい、美宇ちゃんじゃな、ひへっえああ！」

美宇の声もほとんど叫び声で、言葉を囁むどころか、可憐な唇は緩みきって舌を出し
放し。腰つきとともに、スクール水着の肩紐を引っ掛けた柔乳も揺れ弾む。

騎乗位のおかげで、丸見えの結合から悶える表情まで眺めることができた。お兄ちゃん
のいやらしい視線を感じているのは間違いない、横に向きたがる仕草が悩ましい。

「やあんっ、とまんない！ あはあ、こしがかっへに、んふっ、とめらんないよお！」

腰は本心に「勝手に」動いているらしく、嬌声はやや涙声に。

そんな妹の火照った肉体に、悠の手が這い上がり、たわわな巨乳を揉みしだく。女の子
の曲線にも慣れてきて、乳芽を狙って弾くことができた。すると、えつくすキュートの腰
が一段とよく跳ね、痺れを起こす。

（キュートの腰つき、すごい、やらしくて……！）

幹太は膣圧のうねりで激しく扱かれつつ、焦燥感に駆られた亀頭は、ヒダヒダで優しく包まれる。二種類の刺激はどちらも煮えた妹汁を絡めていた。

「これしゅきい！ お兄ちゃん、いいのお！ こふっ、なかれ、こすれへるう！」

「僕もだよ、はあっ、で、でもこれ、激しすぎて！ んうあ、つうくうあ！」

先ほど悠が後背位でしたのと同じ「磨く動き」が、肉棒を滑り落ちてくる。浜へと打ち上げられた魚みたいに暴れる妹の腰は、こちらが悲鳴をあげても止まってくれない。

肉唇がサオの全長にキスを引きずるうち、大きく捲れた。やたら濁ったソープが悠の股関節にも伝い落ちる。

それだけでも、脊髓反射のように身体中がぞくりとした。痺れはすでに脳に達し、思考回路も中毒性の肉悦に侵されている。

「今だけ、美宇で……僕の妹でいてよ、はあ、キュート」

えつくすキュートはウサギの耳で頷き、両手の指を巨乳の上で絡ませた。片方だけ露出した乳玉を、騎乗位ダンスとともに弾ませる。

「き、きゅーとのコト、はあ、そお呼ぶだけだよ？ お兄ちゃん、あくふ」

茹で上がった柔乳よりも赤く頬を染め、ムンムンの色香を蒸らす。

巨乳を見せびらかしつつ、顔を背けたがるのは恥ずかしいから。なのに、浅ましく腰を振りまくっている発情ぶりとのギャップがたまらない。

「美宇、いいぞ？ すごく可愛い、うはあっ、そのままで！」

「お兄ちゃん、こお？ ひはあんつ、きゅーともいいの、あん、気持ちいい！」

恥ずかしがり屋のくせに甘えたがりの妹は、瞳に涙を揺らめかせていた。アイマスクが外れないのが不思議なくらい、ツインテールを振りまわす。

（妹とセックス、最高だよ！ カラダ熱すぎる！）

そんな妹を撫でてやりたい愛情と、犯してやりたい劣情が一緒くたに燃え上がる。

乳揺れのリズムを両手で読みながら、お兄ちゃんは乱暴に腰を突き上げた。

「美宇のオマ○コ、はあ！ オマ○コが僕のずぼって、たっ食べてるぞ！」

煮え滾った肉洞で淫猥な摩擦が繰り返られ、亀頭の神経を溶かされる。そこから巨乳少女の熱や痺れも伝わってくるかのようだ。

お兄ちゃんの突き上げが、妹の喘ぐ唇から舌を押し出す。

「きゅーとのオマ○コはグルメなのっ！ えひあ、お兄ちゃんのも、びくびくつれ、んあはえ！ わはるの、お兄ちゃんの、気持ちいいっていつへるよおお！」

快楽の一体感にふたりは酔いしれ、息びつたりに肉体の震えをシンクロさせた。実の兄妹だからこそ相性も抜群で。

ぢゅばんっばんっばんばん！ ばんばんばんばん！

肉砲が発射の力を溜め始めると同時に、妹汁が俄かに濁り、美宇のほうも摩擦に焦りだす。しどけない唇は涎を垂らしまくり、生乳を枝分かれにぬめらせた。

「びゅっびゅして？ ひはっお兄ちゃん、きゅーと、もっ、もおすぐイクの！ イっへる

オマ○コにお兄ちゃんの、びゅっびゅしてええ！」

しとど濡れたスクール水着にしわが寄るように、上手に腰をくねらせる。お兄ちゃんのためなら、という一生懸命な気持ちがひしひしと伝わってきて、早く「びゅっびゅ」してやらないと可哀想だ。

「おねがぁい！ お兄ちゃんのこと、んぶあ、あはっシャンプー、はやくう！」

ニーソックスの両脚をMの字に屈伸させて、お兄ちゃんとの愛を深める。捲れそうな穴をいつそう窮屈にし、肉太を愛しそうに食い締める。

むちむち感がそる太腿も白濁のソープにまみれていた。手を這わせると、悶えた分の汗がねつとりとべとつく。

「シャンプー出すよ？ み、美宇のなかに、はあっ、僕のシャンプー！」

それきり悠は言葉を発せなくなり、ひたすら息を荒らげた。玉袋が重たくなり、押し出す圧力で勃起の芯に差し掛かってくる。堪えるには、漏れそうになった尿を我慢する数倍の力が必要で、股間の筋肉が悲鳴をあげる。

それでも堪えたいのは、亀頭の感度が最大まで高まっており、心地よい摩擦を少しでも長く、多く感じたいからだ。

カウパーを先走らせながら、もう闇雲に、妹の子宮に求婚する。

「お兄ちゃん、しゅきい！ 大好きだからいいよ、あへあ、なっなかにだひて、たくさんシャンプーしへ、きゅーとのしきゅう、いっぱいだひてええ！」

プロポーズを受け入れた美宇は甲高いななき、怒張が子宮に命中するよう、腰の捻りで導いてくれた。スクール水着のおへそが「S」の字をいくつも繋ぐ。

なやかな小顔は白目を剥きそうになり、汚れた舌を引っ込められない。だらしのない顔つきに、怪盗のアイマスクだけがびしつと決まっている。

「きゅーとイク！ イクのっ、お兄ちゃあん！ きゅーと、オマ○これイク！ もおいっひゃいそお！ あはあ、ずぼずぼ気持ちよしゆいれ、もお、おああへ！」

悠のさきつちよが奥まで届くたび、膣は狭まり、肉棒全体を熱烈に包み込んだ。エラの裏にも肉壁が殺到してこそばゆい。

興奮は最高潮に達し、雁太の質量が急激に膨らんでいく。

「美宇！ シャンプーだぞ、僕の！ ……あっああああああ！」

お兄ちゃんは怒張にありつた力の力を込め、妹の子宮を乱暴にかちあげた。

どびゅどびゅっ！ びゅくびゅく、びゅく！ びゅっびゅ、びゅっ！

悠の体温がペニスを駆け抜け、美宇の子宮へと元気に飛び込んでいく。その最中も粘膜壁に雁首を締められるせいで、一発ごとに重たく、味わい深い。

牝穴も肉棒を搾るように蠕動しつつ、緊縮した。

「れてるっ！ 出てるよお、お兄ちゃんの！ んふああっ、せええきシャンプーいっぱい、おなかふくらんでくよおおおとおおッ！」

えつくすキュートがウサギの耳を二本とも前に倒し、巨乳越しに結合を覗き込む。そこ



から熱水がしぶきを上げ、バスルームに牝のにおいを蔓延させた。

プシャアアアアアアアアアアアア!

絶頂噴水に負けない勢いで、オチンチンも精一杯に噴く。ボディソープよりも濃くて、オシッコよりも滾っている、お兄ちゃんのチンポシャンプーだ。

びゅびゅつどぷ! どぷどぷつ! びゆるびゆるつ、どぷどぷどぷ!

子宮はすでに満タンであり、入りきらない子種が膣へと逆流するのを、雁首で熱く感触できる。「意図して出す」というより「堪えられなくて漏らす」快感も、たまらない。

「気持ちよすぎて……僕、もう……はああああ!」

腰が勝手に跳ねるほどの心地よさに、頭の中は真っ白だ。

中出しに感じやすいマゾウサギは、アイマスクの下で瞳をうつとりと潤ませた。

「あへええ、れ、れてるよ、おにちゃん、あかひゃん……ふにゃああ!」

あどけない顔つきはアクメの恍惚にとろんとして、意識の有無も怪しいくらい。幼稚な舌なめずりで涎を滴らせるほど浅ましく、エクスタシーに溺れている。

仲良し兄妹のずぼずぼセックスに、悠のほうはもう中毒だった。汗だくの生乳をさすりながら、無意識に、うわごとみたいに本音を漏らす。

「はあ、はあ……み、美宇となら、一日中でもエッチできそうだよ」

上下の穴で涎の量が夥しい美宇も、熱を浮かせたような顔をしており、汗みどろの肉体をまだ打ち震わせていた。

「あつ？　ご、ごめんはない、お兄ちゃん……んふうううう！」

刺激されすぎた肉穴の圧力が、ふっと緩む。

チヨロチヨロチヨロチヨロチヨロ！

お兄ちゃんの上に跨っているにもかかわらず、躰のなっていない妹は、もう失禁を我慢しなかった。はしたない笑みに少しの羞恥も浮かべて、温かいオシッコを垂れ流す。

ほんのりと生臭いオシッコは悠の股間を枝分かれに伝い、玉袋の裏まで潤した。煮えたにおいがムンムンと充満する。

「み、見ちゃだめえ。あんっ、恥ずかしいよお……」

丸見えだった結合部を今さらシルクハットで隠す、恥じらいが愛らしい。

「こら、美宇？　っはあ、僕を、おトイレにするなんて」

悪臭はまったく感じられなかった。食後のお茶のような清涼感があり、余韻の優しさを深めてくれる。疲労困憊の肉体にはちょうどよい。

「ひはあ、とまらなかったの。ごめんね、おトイレはきゅーとのほうなのに」

便器願望を吐露しつつ妹も虚脱し、巨乳のポリウムで覆いかぶさってくる。初めての騎乗位で健気に頑張った美宇を、悠はしっかりと抱き締め、囁きあった。

「美宇はボク専用のおトイレだよ。んあふっ、僕だけの」

「お兄ちゃんのおチンチンも、きゅーとの専用、なんだからあ」
会話の途中で唇と唇がくっつきたがる。

「うっ宇佐見先輩!! そっちは違います、お……オシリの穴です!」

「こっちに入りたいんだ。美宇の、くうっ、オシリの穴に!」

挿入の位置が違ふことに妹がはつとするも、鬼畜なお兄ちゃんはお構いなし。

鈍器みたいに重たい雁太は、手始めに恥ずかしがり屋の肛門をノックした。先ほどの開発でぼぐれているらしく、拡張しそうな気配は感じられる。

だが、さすがにペニスでは太すぎて、簡単に入り込めそうにない。

「そっちは許してください、私、ひあつ、オ、オマ○コで頑張りますから!」

美宇本人のアナルセックスへの抵抗感も、括約筋の壁を厚くしていた。

それでも妹の排泄器官に入りたいという倒錯の欲求を堪えきれない。腫れぼったい龟头の半分がかるうじて狭い門を突破する。

痛みになる寸前の強烈な締め付けに、悠は歯を食いしばった。

「は、入らないかな、こっちだと……くうっうう?」

これは侵入できる穴ではない、と思い知らされ、引き返そうとする。

ずぶ……ずぶっ、ずぶずぶ!

そのつもりが腰を後ろに戻せなかった。逆に前に進んで、小穴に太めの杭を打ち込んでしまう。すでに悠は挿入を諦めている、にもかかわらず。

「ひぎいいいいッ! 宇佐見先輩っ、オシリはらめなんです、い、いれないでえ!」

「入っちゃうんだ、かふっ、勝手に! 美宇のオシリに、うああああああ?」

予告も前触れもなかった結合が始まり、宇佐見兄妹はふたりとも驚いた。

アナルが綱引きもできそうな牽引力を発揮し、拒んでいたはずの勃起を呑み込み始めたのだ。小皺の窄まりが幹の太さまで拡がり、黄ばんだ汁を滲ませる。

ぐぶぐぶぐぶぐぶつ！

挿入に逆らっていた力もベクトルの向きを変え、後ろの穴に肉太の栓を連れ込んだ。今も吸い込みが続いており、そう簡単には外せそうにない。

スクール水着の薄生地がお尻の谷間に戻ってきて、サオに引つ掛かる。

肛門を犯されてしまった美宇の小顔が、涙を溜め、いとけない羞恥を浮かべた。

「抜いれつ、くだはい……宇佐見せんばひ、こ、こんなの恥ずかしい……！」

ローターとパイプの三点責めに、アナルファックも追加され、悶え汁の量が夥しい。紺色のスクール水着が蒸れた牝のにおいを蓄える。

その一方で悠は初めての、それも変態御用達のプレイに心の底から感動し、悦に浸っていた。危なっかしく腰をぶるつかせて、淫猥な刺激を肉棒で吟味する。

「はああ、み、美宇の……あなる！　すごい気持ちいい！」

膣のようなヒダヒダ感はないが、液体のヌルヌル感がやたらと粘つくく絡みついた。高温の汁が勃起に熱さを染み込ませてくる。

前の穴と決定的に異なるのは、出入り口の極端な狭さだった。手淫の数倍はある力が集束し、根元だけを苛烈に締め付ける。分厚い紐で括られるみたいで、完全勃起でなければ

潰されているだろう。

アナル少女は快楽に浅ましい肉体を汗みずくにして、濃厚な色気を振りまいた。

「う、宇佐見先輩、んはあ、おねがい……です、抜いて？ オシリが、へんになっへ、あふ、こんなの、壊れちゃいます！」

嫌がる割に吐息を色めかせ、緩みがちな唇を閉じたがっつては、涎を垂らす。

「もしかして、美宇、感じちゃってるのかな？」

「感じてなんか……いい、いません、えへえ」

甘えるような口調に説得力はない。スタンドミラーのおかげで丸見えの表情は、淫欲に染まり、拒絶できていない快楽で瞳を深く潤ませていた。

恥じらう妹にあてられ、保護欲と嗜虐性の両方に拍車がかかる。

「僕は嬉しいんだ、美宇」

彼女の力が入りすぎたお尻を触って、宥めながら、お兄ちゃんは優しく囁いた。

「美宇のバーจินをもう一度味わえるなんて思わなかったよ。オシリはずっと処女だったもんね。だから、これは初めてのセックスだよ、僕たちの」

「私たちの……初めてのの、セックス？」

妹の穴をすべて自分のモノにできた高揚感で、胸がときめくように高鳴る。

肉棒の興奮はありのまま、アナルから彼女へも伝わり、兄妹を仲良く赤面させた。ようやく美宇も、マゾ穴で兄の想いを受け止める気になったみたいだ。

「……宇佐見先輩の、はあ、すごくびくびくしてますよ？ オシリの中で……」

「アナルセックスまでできちゃうカップルなんて、はあ、フツーじゃないよ」

実の兄妹だからこそ、一般の男女より変態的なプレイでなければ、想いを伝えることができない。そして、それができてしまうのが兄妹だ。

また、偽らない姿の妹を抱ける感動を、これまでにない方法で味わいたかった。

「僕たち、付き合おうよ。んくっ、こんなに相性いいんだから、ね？」

ローターとバイブで発情を強制して、腕を拘束し、アナルを無理やり犯して。そこまでしてしまえるいかかわしい背徳感に背筋を撫でられても、もう躊躇はしない。

セックスを通じて妹と愛しあいたい気持ちたちが込みあがる。

「ちゃんとしたデート、とか……連れていつて、ン、くれますか？」

「もちろんだよ。ほら、僕のこと、キュートみたいに呼んでごらん」

その気持ちは妹も一緒なのだろう。SMじみたプレイにもかかわらず、嬉しそうな笑みを浮かべ、バイブの位置をひくひくさせる。

「お、お兄ちゃん……でも、オシリでするなんて、はあ、恥ずかしいです」

「やめにする？ せっかく美宇の大好きな、ずぼずぼ、してあげるのに」

実の兄妹という間違った関係で、しかも間違った穴で。しかし、過ちであればあるほど想いを通じ合わせることができるのが、近親相姦かもしれない。

美宇はまだ迷っていたが、火照った肉体はじっとしていられないらしく、もどかしそう

に腰をくねらせた。誘うような動きでスクール水着を捻り、汗だくの乳玉を転がす。

「はあ、んぷあ……お兄ちゃん、わたし……もっ、もう」

悠がまったく腰を動かさないでいると、妹は焦らされる一方で、涎を吸い上げることもできなかった。上の唇は緩みつつ放しなのに、牝穴はバイブをしっかりと食い締め、肛門もキツキツにうねる。

快楽と羞恥の境界線をふらつく、愛妹の表情が切ない。

「ずぼずぼって、してください……おっ、お兄ちゃん、私もヘンタイにして！」

抜き挿しのおねだりがトーンをまた一段と上げた。

お兄ちゃんは頷くと、後背位セックスの要領で腰を返そうとする。

「気持ちよくなりたいんだね、美宇も。じゃあ僕と一緒に……うわああっ!!」

ところが悠の意図にない動きが始まった。排泄の出口が「ひとりでに」極太をひりだし始めたのだ。汗みずくのお尻が緊張って、サオの太さを押し出す。

窮屈な出口にエラの返しが詰まるおかげで、外れてしまうことはない。

「だっだめ! れちゃう、んくふあっ! で、出ちやいます、ああん、こんなの!」

排便とまったく同じ生理が働いているらしく、ただでさえエッチの最中に失禁の多い妹が赤面した。栓となった男根の太さだけが頼りだ。

次は出かかったモノを我慢する力が働いて、ペニスを留め、引きずり込む。

ぶりゅぶりゅ! ぶりゅっ! ぶりゅぶりゅぶりゅ!

マゾ穴は下品な音を連発し、剛直を抜き挿しした。ひりだす力と留める力が上手い具合に拮抗し、肉棒をみっちりと扱く。

「きかないで！ みみ、ふさいで……へあっ、オチンチンうごくう！」

一回のピストンに五秒はかけて、アナル少女は腰でいやらしく踊り始めた。肉釣り鐘を小気味よく弾ませ、ローターの振動にも喘ぐ。

前後に跳ねるようなダンスは激しく、お尻がお兄ちゃんの上に乗っかる。

直腸の中では、怒張をしゃぶるように妹の液が流れ、熱量をみるみる膨張させた。

「すごいよ、美宇のオシリ、っはあ、僕のオチンチン食べてる！」

後ろの穴にビーズを挿し込んである悠も、前後の快楽に悶絶する。ビーズの圧迫感が肉根をひとまわり大きく、太く感じさせ、摩擦が増大するのだ。

同じ摩擦をお尻の中に送り込まれて、妹も舌を引っ込められない。

「オシリがとまんない、ひはっ、ぶりぶりっ、だめ、音なっちゃうのにい！」

茎膣は力強く擦られるのに対し、亀頭は粘膜に優しく包まれていた。擦れるというよりも、ヌルヌルの粘液で洗われるかのような感覚だ。自分のやじり型ははつきりとしているが、アナルの奥のほうは、例えば「筒」といった明確な形は感じられない。

「んくっ、ふあはあ！ お、お兄ちゃん？ 出ちゃったり、してませんよね？ やつまた！ また出ちゃいそお！」

ひりだすことに切羽詰まった顔になる美宇は、息遣い荒く悩乱していた。敏感な肉体を

熱っぽい発作で茹で上がらせ、ウサギ跳びのポーズを弾ませる。

前の穴は電動パイプに荒らされ、スクール水着の股底を妹汁で潤した。

「ばいぶも！ しびれるっ、んへあ、お兄ちゃあん！ はっ、はげしすぎて！」

背面座位で、腕を縛られている分、腰を動かす。お尻でスタンプでも押すみたいに、悠の下半身にじゃれついてくる。

べとべとの巨乳を揉みしだきながら悠は、ずっと引っ掛かっていたことを尋ねた。

「美宇、っはあ、どうして空港で僕と会った時、嘘の名前言ったりしたの？」

「教えなくても、い、いもうとって気付いて、ひあんっ、欲しかったんれす！ でも、お兄ちゃんったら、ぜんぜん、んあっ、わはしに気付いてくれなくて」

正直で感じやすい牝ウサギが、本音を白状してくれる。

穿り返されているのは排泄器官にもかかわらず、素直な悦がりぶり。粘った汗と湿った吐息は、中毒性の色気をムンムンと漂わせていた。

悠も衝動的な興奮に陥り、妹の尻穴にペニスで追いつがる。

「だけど僕、くうっ、キュートの正体にはすぐ気付いたよ？ エッチする前から、はあ、美宇が僕に甘えたがってること！」

張りのあるお尻に密着したくて、たおやかな腰を抱きかかえる。

妹が姿を偽らないおかげで、想いがまっすぐ届くようだった。それをアナルで精一杯に受け止めてくれる、美宇の気持ちも嬉しい。

「ず、ずるいです、あはうん！ わかつれへ、だまされたふり、なんひえっ！」

「美字もしたことだぞ？ 同じことしちゃうなんて、はあ、僕たちほんと兄妹だ！」

マゾ穴への刺激に責めの言葉も乗せると、妹の純な小顔はますます赤らんだ。それでも生徒会長の肛門は、ぶりゅぶりゅと、はしたない音を立てまくる始末。

（アナルセックス……最高！）

今ハメているのが排泄の穴とは思えない。うねる圧力で押し出されては、真空効果など比較にならない強烈な吸い込みで、奥まで連れ戻される。

吸い込みどころか「バキューム」と呼んでも差し支えない引力だ。粘膜のぬかるんだ感触も卑猥で、オチンチンがどんどん昂っていく。

「ああん！ おっオシリなのに、ずぼずぼつれ、んはああ！ らめなんです、わたひつ、オシリのあな、へっ、ヘンになっへるうう！」

快感を吐露する妹の顔つきは緩みきって、みっともない。眉を八の字に傾け、つぶらな瞳はまどろむように惚けていた。舌なめずりに自覚があるなら、真性の変態だ。

ぶりゅぶりゅ！ ぶりゅつ、ぶりゅぶりゅ！

ふたり一緒に腰を振り、淫らな関係を深めていく。結合部では下品な音を立てまくっておきながら、肩越しに、ロマンチックに見詰めあつてキスも始める。

「んちゅうう、ひはっあ、あ、お兄ちゃん、もっとひて？」

「まだまだ、っおぐ、はあっぶ、こ、これからだぞ！」

舌の先同士で突つつきあったり、唇から外れて頬を舐めたり。

パートナーと吐息をダイレクトに交換すればするほど、頭に熱がまわった。妹もぼうつとした表情で、お兄ちゃんと一緒に汗をかく。

その最中、妹のセーラー服の中で携帯電話が鳴った。

「ン、ふはあっ！ 無視してください、お兄ちゃん、れあっ、んひああ？」

腕を拘束されている彼女に代わって、悠が携帯電話を探し出す。

それを開くと、女性の名前が表示された。美宇の友達からだろう。悠が勝手に受信し、妹の耳に当ててしまう。

「こら、美宇？ はあ、ともだちを待たせちゃ、うあっあ、ダメだよ？」

「お兄ちゃんっ!? だっ、だめ……でんわ、ひへえ、カオに近づけないでえ！」

美宇は真っ赤に恥ずかしがり、瞳に涙をたたえた。それでも、腰を止めることは自分でできないらしく、お尻を落下させてくる。

電話の向こうでは女子の気配がいくつもあった。

『うさみん、もう帰っちゃった？ ……ね、声がヘンだけど、どうかしたの?』

「ひはっ、なんれも……ないから、でんわきって、おおっ、おねがい！」

多感な妹が涙ながらに訴えても、火照った肉体はアナルの摩擦に大忙しだ。お兄ちゃんのほうからも腰を返し、煮えた粘膜をぐちゃぐちゃにかき混ぜる。

美宇の涎は携帯電話にも垂れた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takent Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトに続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ! **19日発売!**
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快なBlog**も更新中!



<http://www.comic-alkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!